
王女と侍女

嬉遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王女と侍女

【Nコード】

N5465C

【作者名】

嬉遊

【あらすじ】

あたしは王女の側で働き始めた。けれど本当の仕事は、この王女を殺すこと……。

1 侍女の秘密

「え……あたしが……侍女として、姫さまにお仕えするのですか……？」

女官長であるアリアさまは、にっこりと笑った。

「ええ。年が同じこともあり、姫さまは貴女をお気に召しているようですよ」

「姫……さまが……」

表情は、初めての大仕事で戸惑っている侍女を繕っていたが、内心拍手喝采だ。

まさかこんなに早く、あの王女を殺す機会が訪れるなんて……。

「今日にでも来て欲しいとのことでしたから、しっかり仕事して下さいね」

そんなあたしの本当の目的も知らず、アリアさまは王女の部屋に案内していく。

……あたしの本当の仕事は、王女を殺すこと。

物心ついた時には既に、そういう殺しを商売とする一族の1人であり、殺しの方法を習っていた。

10歳の頃から殺しを始めて、6年たった今では、あたしは一族の中ではちよつとした有名な人だ。

通称《血塗れのシェリル》とか、《サディストシェリー》とか……。

要するにあたしは、じわじわと苦しめる殺し方を好むのだ。

そして、今の標的は、エステイニア王国の第一王女である、アルツエルナ・ローザ・リア・エステイニアだ。

「あたし……いえ、わたくしは、本日から姫さまにお仕えすることになりました、シェリルと申します」

部屋で2人つきりになってから、あたしはそう切り出した。
黒い頭をぺこりと下げる。

「……………」

……無視か？

しばらくたつても返事がくる様子はないので、もう一度。

「あの……………」

「私は」

やっと反応があつた。

王女は緑色の瞳を細め、ゆったりと笑った。

「知ってると思うけど……アルツエルナ・ローザ・リア・エステイニア。親しい人達にはルーナって呼ばれてるの。だから貴女も、ルーナって呼んでね」

アルツエルナの最後をとってルーナか？……この王女らしい愛称だ。

「ルーナさまで……………」

「うっん、呼び捨てがいいわ。ルーナって。」

「ですが……………」

王女は茶目つ気たつぷりにウインクした。

「いいじゃない。2人きりの時ぐらいは。ね？」

お願いっ！と手を合わせて言われたら、折れるしかないだろう。

「……………っ、わかりました。2人きりの時だけ、ルーナとお呼びします」

「うんっ！そうして頂戴っ！」

すると、ルーナはふいに小さく首をかしげた。

透けるような金髪がきらりと光った。

「貴女は？シェリルだと……愛称はシェリーかしら？」

「はい。そうですね……………」

まさかサディストシェリーですとは口が裂けても言えない。……

王宮から追い出されちゃうかも。

「じゃあシェリーって呼ぶわね！あ、それから、無理に“わたくし”とか言わなくても良いのよ？“あたし”で全然構わない」

「え……はい。すみません……」

さっきあたしが言い直したから、気にかけてくれていたのかも……。

……なんか、結構いい人っぽくて、拍子抜けした。

何故、依頼人は、この王女を殺すことを望んだのだろう。

……なんて、考えても仕方が無い。あたしのような下っ端には、そんな事知る権利はないのだから。

「シェリー？どうしたの？ぼーっとして……」

「えっ、あっ、いえ。何でもないです」

……らしくない。こんな……人を殺すことをためらうなんて……。大丈夫だ。多分、この程度の王女なら、すぐに殺れる。

「姫さま……」

「ルーナよ」

「……失礼しました。ルーナ、これからよろしくお願い致します」

2 主女の素顔

「シェリルっ」

王宮の廊下を歩いていると、後ろからアリアさまに声をかけられた。

「アリアさま」

「どうです？ 姫さまとは……」

「ええ」

あたしがルーナの側で働き始めてから、2日がたった。

アリアさまは……心配してくれているのだろう。

「よくしていただいております。ルーナ……いえ、姫さまには」

「……ルーナ？」

アリアさまの眉がぴくりと動いた。……やばい。

「あっ、いえ、違うんです。その……姫さまが、自分のことはルーナって呼ぶようにおっしゃっていて……」

アリアさまはしばらく黙り込んでしまった。

そしてため息を吐いて、

「姫さまがそうおっしゃるのなら、仕方ありません。ですが、人前では気を付けるようにして下さいね」

「はい……」

お前のせいであたしが怒られちゃったじゃん……。

もちろん本人にはそんなことは言えないので、心のなかで叫んでおく。しゅんとなったあたしを見て、アリアさまは何を思ったか、ふっと笑った。

「…その様子だと、仲もよくして頂いているのでしょうかね」

「あ……はい。今日もこれから遊山に……」

「姫さまと、貴女だけで？」

「はい……それが心配なんですけど……」

別にたいして心配ではないのだが、表情を曇らせて言った。

「護衛とか……姫さまは必要ないとおっしゃるのですが……。本当に大丈夫なのでしょうが……」

「平気だと思いますよ」

即答。そんなに信用してるのか……？

「姫さまは、身を守る術をきちんとわきまえています。それも、並みではありませんからね。いざとなったら、貴女のこと守って下さるかもしれません」

「はあ……」

そこまで信用しちゃって、本当に良いのだろうか。

それに、いくら護身術が得意とはいえ、あたしの手にかかれば意味もないだろうに。

「では、気を付けて行くですよ」

「あ……はい」

「あら……？シエリー、そのバスケットはどうしたの？昼食をとりに行ったんじゃない……」

「……これがそうらしいんですけど……」

昨日、昼食を2人分、と確かに頼んだハズなのに……これは何かの間違いだろうか。

やけに大きいバスケットを渡された。しかも、重さはハンパじゃない。普通の女の子だったら持てないって……。

「……きつと私達だけじゃあ食べきれないわね」

「そうですよねえ……」

「でも、せっかく作ってくれたんだから、全部持って行きましょう」
そう言ったルーナは、すでに乗馬服に着替えていた。

さすがに、いつものフリフリドレスじゃあキツイのだろう。

「シエリーは？その格好で行くの？」

その格好とは、女官服の事だ。

踝までの長いスカートでは、そりゃあ乗りにくいけど……。

「ええ。慣れてますから」

結局、5人分くらいありそうな昼食を持ち、城を出た。ルーナはもともと外にでるのが好きらしい。馬を見事に乗りこなしていた。「昔はね、よく遊山に出かけたのよ。でも最近は、そんなことして暇があつたら、舞踏や作法のお勉強をなさいつて言つて、なかなか行かせてくれなかったの」

「王女つて大変なんですね……」

「そうなの。だから今日はほんと久しぶりの遊山だわ!」

そう言つて、ルーナは速度をあげた。

「あ……っ、ルーナっ!」

あたしも急いで後を追う。

活発な王女だなあ、なんて思いながら。

けれどこの後、

あたしはこの王女の本当の姿を見破れなかった事を、後悔することになる。

「気持ちいいーっ。やっぱり山つて良いわよねー」

しばらく走つたところで、あたし達は昼食をとることにした。

そして、殺すのも邪魔が入らない今にしよう。

死体も、どこか……見つからないようなところに隠そう。ここなら滅多に人は来ないし、地面の血も目立たないようにしておけば問題ない。

だから、今回はじっくり殺れる。思いっきり時間をかけて。

そして、今日中に、あたしはこの国を出る。城の人達が、王女が戻らないことに気付く前に。

……そして本家に戻れば、任務完了だ。

ルーナに出すお茶の中に、そっと薬を入れた。

簡単に言っと、痺れた薬だ。数秒で、体全身が痺れてくる。上手くいけば声も出なくなる。

「どうぞ」

その薬入りのお茶を、いつも通りの笑顔で出した。

「ありがとう」

ルーナもいつも通りの笑顔で受け取る。

そして、何も疑わず、お茶を口元へ持っていく……。

「……………」

……お茶を、捨てた。

「……ル……ルーナ……？」

ガラスのカップの取っ手を持ち、何も入っていない中を見せてくる。

緑色の瞳を細め、物騒に笑いながら。

「……この中に入っていたもの、なあに？」

心臓が激しく脈打つ。震えそうな声を懸命におさえ、何とか言っ
た。

「何って……ただのお茶ですが……？」

ルーナはルーナらしくない瞳で、くすりと笑った。

「命落とすようなことは無いみたいだけど……ちょあっと危ないわ
よねえ」

声が、出なかった。

ルーナのどろりとした声が、あたしの頭の中で絡み付く。

「恐ろしいわね。もしかして、この薬で私をどうにかしてから、殺
そうとか……考えてた？」

ずばりと 言い当てられる。

だめだ……。

これ以上、こいつを生かしておくわけにはいかない……っ！

「……………っ！」

スカートの下の靴下止めにさしてある短剣を抜き、ルーナの首を切りにかかる。

それを、ルーナは難なく避けた。

「な……！？」

「遅い」

次の瞬間、ルーナが目の前に迫り、避ける間もなくルーナの拳がみぞおちに入った。

「がっ……………っ！！」

取り落とした短剣をルーナが拾い、動けないあたしの首にあてた。

「……………っ！！」

「……貴女、もしかして、人をじわじわと苦しめるのが好き？」

肯定、できなかった。

動くことも、声を出すことさえできない。

ルーナは微笑みを浮かべたまま、あたしの首を切った。

「……あっ！！」

「痛い？痛いでしょう？」

痛い。血が流れる。馴染みのある匂い。

「大丈夫。そんなに深く切ってないから、多分死なないわ」

そう言いながら、今度は腹を切る。

「ぐ……………っ！」

痛い。……痛いなんてもんじゃない……。

このまま……………このまま殺してくれば良いのに……………っ！

「きつと……貴女がこうやって殺してきた人達も、早く死にたいって思ってたと思うわ。……………つらいでしょう。早く死にたいでしょう」

「殺……………っ……………ごふっ……………！」

血を吐いた。

腹からは、微かに内臓が見えている。

「さて……………そろそろ助けを呼んでくるわ。貴女にはまだ、死んでもらっちゃ困るもの」

薄れる意識の中で、ルーナがわざとらしく息を吸う音が聞こえた。

「誰かあつ！！助けてえ！！だれかあつ！！」
そこで、意識を手放した……。

目を開けると、そこはいつものあたしの部屋だった。

……悪い夢でも見ていたような気がする。

でも、首にふれると包帯が巻いてあって、夢じゃなかったんだと思ひ知らされる。

廊下のほうから、声が聞こえてきた。

「放して女官長っ！」

「いけません姫さま！まだ入っては……っ！」

「どうして！？シェリーに会わせてよ！放してえっ！」

思いつきリドアーが開いた。

そして、本当に心配しているような表情の……ルーナ。

「シェリーっ！」

ルーナはあたしに抱きついてきた。

あたしは思わず身をかくす。

「ごめんね……シェリー……私のせいで……っ！」

これは……本気か？

本当に……そう思っているのだろうか。

「シェリル……話は姫さまから聞きました。」

まさか……自分がやったと、話したのか？

しかし、アリアさまの口から出たのは、予想外の内容だった。

「刺客から狙われていた姫さまを、貴女が助けたのだと……。こんなにボロボロになってまで……」

後半は、ほとんど頭に入ってなかった。

刺客が……あたしを傷つけた……？

そんなことは……っ。

「ちが……っ、違います！あたしを傷つけたのは姫さまで……っ！」

アリアさまは眉をひそめた。

「……混乱しているようですね。姫さまは、貴女を傷つけたりしないハズですよ？」

そんなことはない……っ！実際あたしを傷つけたのだから……っ！
「女官長……悪いんだけど、ちよつと2人きりにしてくれない……？」

この子、ちよつと混乱してるみたいだから。そんなことを言いたげな表情で言った。

「……わかりました」

頷き、素直に出ていってしまった。

部屋には、あたしとルーナだけ。

「……貴女、馬鹿じゃないの？」

心底呆れたように、ルーナは言う。

「私、これでもこの国の王女なのよ？貴女の言うことより、私の方が信じてもらえるわ」

そんなの、知ってる。だけど、言わずにはいられなかった。

更にルーナは、続けた。

「しかも、よくあんなで刺客やつてられるわね。演技の方はけっこう良いけど、殺しは全然。もつとどうにかした方がいいんじゃない？」

それだけ言つて、ルーナは部屋を出た。

しばらく、放心した後、あたしは水道へ向かった。

今までのことを、全部洗い流すように、頭から水を被る。

「許せない……」

許せない……っ！

あそこまで言われて……黙ってなんかいられない……！

悔しい……。悔しい……。っ！

絶対あいつを……

あいつを殺してやる……っ！！

3 勝負の行方

あの王女豹変事件から、数日が過ぎた。

あれからルーナは豹変することもなく、いつものやわらかな雰囲気
の王女だ。

しかも、どういう訳だか、あたしが刺客であると知りながら、ル
ーナはあたしを側に置いていた。

「ねえシェリー、この緑柱石エメラルドの首飾りと、銀のかんざし、どっちが
良いと思う？」

「そう……ですね。どちらもお似合いですけど……首飾りの方が華
やかで良いと思います」

「じゃあ、首飾りこしちをもらっていいこう」

たまに、こんなふうに2人で出かけたりもする。

……一番腹がたつのは、こんな時だ。あたしを刺客だと知りなが
ら、平気で話しかけたり触ったりしてくる。

その余裕が、苛々する。

「どうしたの？ シェリー。そんな怖い顔しちゃって」
ひょいと顔を覗き込んでくる。

一瞬、明るい緑の瞳が、あの時のルーナの瞳と重なった。

「……っ、いえ……なんでも……ないです」

「そう？」

その後は、あたしを気遣ったのか、ルーナがあたしに話しかける
ことはなかった。

「……リル……シェリル？」

アリアさまに呼ばれて我にかえる。

気付くとあたしは、王宮の廊下の壁に手をついて、その手を見つ

めていた。

「……シエリル……どうか、しましたか？」

精神的に大丈夫か、とでも言いたげだった。そのくらい、あたしの行動は変だったのかもしれない。

「……別に……なんでも、ないんです。ご心配おかけしてすみません」

「もしかして……姫さまにお仕えするのが、大変なのですか？」

「……………」

大変、というワケではないと思う。

確かに……警戒して、精神的に疲れているやのかもしれないけど。

「……いえ。そんな事はございません。大丈夫です」

急いで頭を下げて、その場から立ち去った。

……そろそろ、決着をつけないと、いけないかもしれない。

毒は飲んでくれないみたいだから、自然に殺すのは無理だとしても。

……そう、あたしはあの事件で、何故依頼人がこの王女を殺すように言ったのか、わかった気がした。

あれは……危険だ。

生かしておいてはならない存在なのだと思う。

……だから、あたしがこの手で、あいつの息の根を止めてやらなければならぬ。

「姫さま」

部屋で2人きり、あたしが呼びかけると、ルーナは怪訝そうな顔をした。

「どうしたの？私のことはルーナって……」

「いいえ、姫さま」

小さく息を吐いて、続けた。

「あたし……このお城を出ようと思うんです」

ルーナはすこし目を見張った。しかし、すぐにいつもの笑顔に戻る。

「そう……残念ね。私、貴女の事、けっこう気に入っていたのに。

……いつ行くの？」

この前と同じところから短剣を抜いて、呟くように言った。

「貴女を……殺してから」

ルーナは、しばらく表情を変えなかった。そして部屋の隅にある短剣を取り、物騒に、にやりと笑った。

「貴女……本当に馬鹿みたいね。あの時、私の实力を見たでしょう？」

見た。確かに見た。けれど……。

「任務を遂行しないで戻るより、死んだ方が良いですから」
もちろん、遂行できるのが一番良い。

「へえ……みんなそう思っているの？」

「……さあ。どうなんでしょうね」

言い終わる前に飛び出した。

ギインという音で部屋が満たされる。

ルーナはあたしの短剣を振り払い、跳躍してあたしの後ろにまわった。

振り返りざま跳んで避けたが間に合わず、ルーナの剣が頬をかすめた。

「……っ！」

体勢をたてなおす。

ぎりっ、と歯をくいしばる。

「なあに？その顔。負けるのが、そんなに悔しい？」

ルーナの表情には余裕さえあった。それに比べてあたしは……。

「……負けることは……もう、どうでもいい。ただ……」

ただ、何故王女^{ルーナ}を殺さなければならぬのか、それだけが気になる。

確かに、この人は危険だ。

だけど、あたしがあそこで仕掛けなければ、ルーナはルーナのま
まだった。

あたしがただの侍女だったら、豹変なんてしなかつのに。
それに……

『私、貴女の事、けっこう気に入っていたのに』

あれは、多分、本気だった。

よく考えると、素晴らしい事だ。

だれかに、気に入られるなんて。

「……でも、あたしは、貴女を殺さなければならぬのです」

「何故？」

「……仕事、だからです……っ！」

とび出した。

ルーナの心臓の方へ短剣を向ける。

「……っ！」

ルーナはあたしの短剣を弾き、そしてそのまま……。

「あ……っ！」

あたしの腹に、ルーナの短剣が突き刺さった。

ルーナはちらりとあたしの顔を見て、短剣を抜いた。

血が、大量に出て、その場に倒れこむ。

「う……」

「シェリー……」

ルーナは冷静に短剣の血を拭いながら、淡々と話す。

「私は……貴女を殺したくなかったわ。王宮で働く侍女なんて、ど
いつもこいつもつまらないんだもの。話し相手にも遊び相手にもな
らない。……だから、貴女が好きだった」

「……………」

「でも、貴女がその気なら仕方ないわよね。ここで貴女を殺さなけ
れば、私が死んでた」

そう……あたしが殺されなければ、ルーナを殺せていた。

だけど……。

「あた……しも……好きだった……かも……」
「……………」

刺客だと知られたら、殺されるのが普通だ。

それなのに、ルーナは、そんなあたしを好きだと言った。
それが、どんなに嬉しかったか。

「ありがとう……シエリー。貴女はこの前と同じように、刺客から私を守って死んだ事にするわ」

「……はい……」

何故か、涙が出た。

演技以外で泣いた事なんて、ないのに。

ルーナは血を拭った剣を鞘におさめ、叫んだ。

「助けてえっ！シエリーが……シエリーがあっ……！」

霞んでいく意識の中で、ルーナの声だけを聞いていた。

……あんな一族から、さっさと抜けてしまえば、こんな事にはならなかったかもしれない。

ルーナとは、ただの王女と侍女、という関係だったかもしれない。
だけど、それはもう、叶わない事だ。

……だから、

願わくば、次に生まれ変わる時は、

人を殺めることのない、綺麗な人になりますよう……

3 勝負の行方（後書き）

初めまして、嬉遊と申します。

この拙い文章を最後まで呼んでくださり、本当にありがとうございました。

これからもよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465c/>

王女と侍女

2010年12月19日00時29分発行